

先人が遺した宝もの

Kyushu Civil Engineering Heritage

01

「特集：土木遺産in九州」は、本号から「先人が遺した宝もの」と題を改め、内容を見直しました。今後は、地域の発展、産業、風土・文化、暮らしと土木遺産との関りに焦点を絞り、地域をよく知る人物へのインタビューを柱に、有識者の声(Voice)も併せて、「地域の宝もの」である土木遺産の魅力をより深く紹介していきます。なお「土木遺産in九州」の情報は、協会ホームページに引き続き掲載しています。

筑後川河口をめぐる旅へ



photo: 筑後川と昇開橋

九州一の大河・筑後川の河口に、家具の町・大川が発展した歴史をたどる

熊本・大分・福岡・佐賀の4県を流れ下る筑後川は、総延長約143km。流域に暮らす人々は100万人を超え、多様な歴史・産業・文化を育んできました。この筑後川に支えられ、見守られてきた大川の歩みを、改めて振り返ってみましょう。



「筑後川新聞」編集長 古賀 秀之 さん

筑後川は河口の町・大川にとって、どのような存在なのでしょう？

筑後川は大川市民にとって、本当に身近な存在なのです。私が理事を務めるNPO法人筑後川流域連携倶楽部が年6回、発行する「筑後川新聞」の編集長を28年間も続けているのは、まさに筑後川への愛着と郷土への恩返しと言えるのかもしれません。

大川は日本一の家具の町として知られていますが、家具製造が盛んになったのも、実は筑後川との関わりが深

Interview

インタビュー

いと言えるのです。

家具作りの歴史は、今から約500年前の室町時代にまでさかのぼります。大川は当時から港であり、穀倉地帯であった筑紫平野の物産が集まる場所であったため、船大工が多く住んでいたのです。室町幕府の家臣・榎津久米之介(えのきづ くめのすけ)は大川の榎津周辺で家臣たちには生計をたてるために、当時この地でさかんであった造船の仕事に従事させ、家具や調



木工の祖 榎津 久米之介 像

度品を作ることを勧めたのです。これが家具作りのはじまりとされています。私は弘法大師とエツの逸話みたいな、ある種の民間伝承じゃないかと思っています。船大工の技は、その後、田



古賀さんと取材陣

に水を汲み上げる水車作りに活かされ、大変に評判となりました。

※) 弘法大師が、筑後川を舟で渡してもらったお礼に、アシの葉を川に流したところ、魚(エツ)の群れに変わったという言い伝え。

家具作りの基礎は、どのように整えられていくのでしょうか？

たとえば材料となる木材は、江戸時代の初めころから、筑後川上流の大分県日田市から運ばれました。日田杉などの丸太を組んだ「筏(いかだ)流し」で筑後川を下るのですが、盛んになったのは明治以降です。筑後川中流に建造された夜明ダムの着工がはじまる昭和27年(1952)まで続けられていました。



花宗川に浮かぶ日田からの筏流し(昭和20年代)

江戸時代の大川地区は、久留米藩と柳河藩が境を接するという珍しい「藩境の町」であり、昭和初めころには、街道沿いに問屋、小売店が並び、家具の販売にも役立っていたようです。



久留米藩榎津町と柳河藩小保町の御境石

また江戸中期に久留米藩が若津(わかづ)港を開いたことにより、水運の重要拠点となり、大いににぎわいました。



明治18年(1885)頃の若津港渡船場

明治時代になると、独特のデザイン、機能を持つ箆笥が開発され、人気を集めます。当時、佐賀の銀行は1行だけだったのに、若津には7行もあったという記録が残り、若津港が地域経済の中心だったことが想像できます。

明治政府は筑後川の水運を重視し、明治23年(1890)に若津港導流堤(デ・レーケ導流堤)を築造します。干潮時に見せる石積みのおかげから、筑後川にひそむ「龍」と言う人もいますが、地元では名産の「大鰻」にたとえる人が多いですね。

この建設費用が現在の金額で約2000億円。当時の佐賀県の年間予算の2倍に当たる金額ですから、この支出には政府中枢で活躍した大隈重信

翁の関与があったのでは、と私はひそかに推測しています。

この導流堤の完成後、若津港には外国航路の大型蒸気船も来航できるようになり、流域の物産の取引もさらに増大します。明治29年(1896)の統計資料によれば、貨物取扱高は博多港の2倍以上もあり、若津港が九州最大の貿易港だったことが分かります。

大川家具が全国に知られるようになったのは、なぜでしょう？

この若津港には明治末から大正初めにかけて深川造船所があり、緻密な木工技術を活用して木造蒸気船や鉄道車両などが製造され、九州や中国、関西にまで広く出荷されました。ちなみに西鉄の路面電車の車両も、ここで製造されたということです。

戦後の復興期、家屋や家具の需要が高まり、大川にも木工ブームが到来

します。さらに工芸デザイナーのデザインによる洗練された「引手なしタンス」が評判を呼び、この頃から大川家具は全国ブランドに成長して



大川調の「引手なしタンス」

いきます。全国各地で展示会を開催し、品質の高さをアピールすることで、まさに飛躍的に業績を伸ばしていくのです。伝統の木工の技、良質な材料、金属・塗装・ガラス加工などの技術集団がそろっていたこと。これこそが、大川が日本一の家具の町に発展した最大の要因ではないでしょうか。

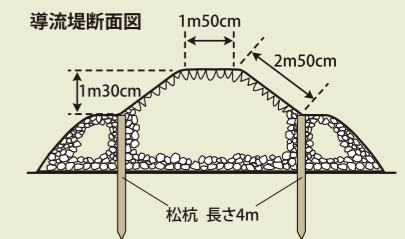
Kyushu Civil Engineering Heritage

土木遺産 in 九州

100年後も現役で航路を守る

大きな干満差の影響で、筑後川左岸には土砂が堆積しやすく、船舶航行の障害となっていました。明治政府はオランダ人土木技師ヨハネス・デ・レーケを招き、河口から上流へ約6.5kmの長さで延びる若津港導流堤を築造させます。完成は明治23年(1890)。技師の名前にちなみ、デ・レーケ導流堤と呼ばれます。

この堤防が左岸側に流れを導き、流速を強めることで、堆積した土砂を河口へと押し流すのです。完成から100年以上を経たいまも、その機能を持続しているのには驚かされます。



【筑後川導流堤(デ・レーケ導流堤)】

- 所在地/福岡県大川市、佐賀県佐賀市川副町
- 完成年/明治23年(1890)
- 監修者/ヨハネス・デ・レーケ
- 設計者/石黒五十二
- 管理者/福岡県
- 文化財指定等/土木学会選奨土木遺産



家具の町・大川の歴史

<p>1537年(天文6年) 木工の祖・榎津久米介(えのきづ くめのすけ)が家臣の生活のために指物を作らせたことが大川家具の発祥とされる。</p>	<p>1751年(宝暦1年) 久留米藩によって若津港が開かれる。</p>	<p>1812年(文化9年) 榎津指物中興の祖、田上嘉作が榎津長町に生まれる。</p>	<p>1890年(明治23年) オランダ人技術者ヨハネス・デ・レーケの指導により若津港導流堤がつくられる。</p>	<p>1952年(昭和27年) 工芸デザイナー河内諒(こうちまこと)の指導によって生み出された「引手なしタンス」は、大川を代表する家具として高く評価された。</p>	<p>現在、大川のインテリア産業は家具・建具の産地から、住宅関連産業も含めたインテリアシティとして発展している。</p>
<p>1681年(天和1年) 筑後川で日田の筏(いかだ)流しが始まる。盛んになったのは明治以降で夜明けダムの工事が始まるまで続いた。</p>	<p>1774年(安永3年) 柳河藩が住吉に港を開き、大川は筑後川河口の水運の町となる。</p>	<p>1877年(明治10年頃) 「榎津箆笥(えのきづたんす)」という大川独特のデザイン、機能を持った衣裳タンスが生産され始めた。</p>	<p>1935年(昭和10年) 旧国鉄佐賀線の鉄道路橋として昇開橋が開通。</p>	<p>1954年(昭和29年) 大川町・三叉村、大野島村、田口村、川口村、木室村の一町五ヶ村が合併し、大川市が誕生。</p>	<p>1979年(昭和54年) 生産額1千億円を超える日本一の家具の町となる。</p>

Voice

ボイス

橋桁が昇降する可動橋が、歩道橋として現存

公益財団法人 筑後川昇開橋観光財団
事務局長 下川 昌一 さん

鉄道と船がどちらも通れる橋

筑後川をはさんで向き合う若津港と諸富(もろどみ)港の行き来は、ずっと渡し舟だけだったと、私は聞いています。それが大正時代、長崎ー熊本間の移動時間を短くするため、旧国鉄佐賀線の新路線が計画されます。同鹿児島本線矢部川駅(現在の瀬高駅)と同長崎本線佐賀駅を結び、鳥栖を経由しないでショートカットするルートでした。



蒸気機関車が走っていた頃(写真提供:吉村 明氏)

当時、筑後川には高いマストや煙突のある大型船が、年間600隻以上も航行していたそうです。つまり、新しい橋では鉄道と大型船、そのどちらも通行できることが必須とされ、橋桁の一部が上下する、現在の橋が設計されたのだそうです。



大型蒸気船が通行する様子(写真提供:吉次 敏孝氏)

愛され続けた地域のシンボル

昭和10年(1935)に待望の筑後川昇開橋が完成します。この鉄道路線の開業によって、大川家具は西九州へと販路を拡大したそうです。



船の航行を優先して、昇開橋の橋桁は通常、上昇したままであり、列車の通過時だけ下降しました。「橋の降り始めたけん、汽車の来るバイ」と、周辺の住民は時計代わりに利用し、親しんでいたということです。やがて戦後の車社会の到来によって昭和62年(1987)、同佐賀線は廃線となります。鉄道の構造物は廃線後、普通は撤去されますが、地域のシンボルとして深く愛された昇開橋は、存続を望む声を受けて、歩道橋として保存されました。おかげで誰もが歩いて渡れる可動橋として、いまも現存しているのです。



「長崎のデパートが大川駅に倉庫を持ち、家具を仕入れていた時代もあった」と話す昇開橋の操作員・古賀満義さん

旧吉原家住宅・資料館
(国指定重要文化財)
柳河藩小保町の別荘職を務め、後には蒲池組の大庄屋となった吉原家の居宅。御成門や公私を分けた空間構成、繊細な意匠など、見どころが豊富です。

筑後川昇開橋まで車で
●九州自動車道…八女ICから国道442号を佐賀方面へ約35分
●長崎自動車道…東背振ICから国道385号を柳川方面へ約30分
●有明海沿岸道路(無料)…大川中央ICから約5分



大川清力美術館
明治時代の洋館を平成13年(2001)から美術館として公開。大川出身の溝江勘二の作品などを展示しています。



風浪宮(国指定重要文化財)
約1800年前に創建された神功皇后ゆかりの神社です。2月の大祭では「裸ん行」「潮井まいり」「御神幸」「流鎧馬」など、古式豊かな神事が行われます。



志岐蒲鉾本店
約170年の歴史を刻む老舗です。上品な魚の旨みとプリとした食感の蒲鉾をはじめ、品ぞろえも豊富です。



古賀政男記念館
作曲家として活躍した偉業をたたえる記念館です。白亜の塔をシンボルとして、展示室、オーディオ装置などがあり、愛用の楽器、遺品の数々が展示されています。



願蓮寺
創建は天文5年(1536)。伝統的様式を留める本堂や鐘楼があり、境内には榎津久米之介の銅像があります。

Tourist information etc.

観光情報など

大川TERRAZZA(テラツツァ)

筑後川昇開橋のすぐ上流にある大川市観光・インテリア情報ステーション。カフェや土産販売、組子製作体験のほか、市内200社の家具会社の商品選びの相談もできます。



若波酒造

大正11年(1922)創業の老舗蔵。「押し寄せる味わい、ずっと引き行く余韻」の酒が特徴です。



志岐蒲鉾本店

約170年の歴史を刻む老舗です。上品な魚の旨みとプリとした食感の蒲鉾をはじめ、品ぞろえも豊富です。



庄分酢

300年間、守り続けた一子相伝の伝統技法で、酢造りを続ける老舗蔵。有機玄米くず酢が、特におすすめです。

Column

コラム

ヨハネス・デ・レーケ



Johannis de Rijke
(1842年 - 1913年)

写真提供:さぼう遊学館(岐阜県海津市)

1842年生まれのオランダ人土木技師。日本の近代化にあたって明治政府は教育、医学、法律、土木などの各分野の専門家を欧米から招いて雇用しました。治水と築港の土木技術者として採用されたデ・レーケは、明治6年(1873)から明治36年(1903)までの30年間、日本に滞在し、木曾川三川分流計画をはじめ、大阪港・三池港の築港計画など、数々の業績を上げています。筑後川では2回の視察を経て若津港導流堤(デ・レーケ導流堤)の建造を指揮し、日本人技師・石黒五十二(いしぐろいそじ)に設計を担当させています。

Kyushu Civil Engineering Heritage

土木遺産 in 九州

【筑後川昇開橋】

- 所在地/福岡県大川市、佐賀県佐賀市諸富町
- 完成年/昭和10年(1935)完成
- 昭和62年(1987)廃止、平成8年(1996)歩道として整備
- 設計者/橋梁=稲葉権兵衛(旧鉄道省大臣官房研究所)
- 昇開機構=坂本種芳(旧鉄道省工作局)
- 施工者/横河橋梁製作所
- 管理者/筑後川昇開橋観光財団
- 文化財指定等/国指定重要文化財



土木遺産in九州



大川市観光ナビ



公益財団法人
筑後川昇開橋観光財団

